# 「イエス誕生の告知」

ルカ1:26~38

- 1. はじめに
  - (1) 3つの告知
    - ①ザカリヤへの告知 (ルカ)
    - ②マリアへの告知 (ルカ)
    - ③ヨセフへの告知(マタ)
  - (2) ルカにある告知の特徴
    - ①私的情報
    - ②天使は、「ガブリエル」と呼ばれている。
    - ③マリアの視点から書かれている。
  - (3) ザカリヤへの告知とマリアへの告知には、相関関係がある。
    - ①構成方法が似ている。
    - ②内容が似ている。
- 2. アウトライン
  - (1) 背景 (舞台) (26~27節)
  - (2) 告知(28~38節)
    - \*旧約聖書のパターンが見られる。
    - \*それをモデルとして最初の告知が書かれた。
    - \*最初の告知をモデルとして次の告知が書かれた。
    - ①天使の出現
    - ②見た人の恐れ
    - ③励ましの言葉(恐れるな)
    - ④神からのメッセージ
    - ⑤不信仰の言葉としるしの要求
    - ⑥神からのしるし
- 3. メッセージのゴール
  - (1) マリアに関する誤解
  - (2) 処女降誕の重要性

このメッセージは、イエス誕生の告知から、メシアについて学ぼうとするものである。

## I. 背景(舞台)(26~27節)

#### 1. 26 節

「ところで、その六か月目に、御使いガブリエルが、神から遣わされてガリラヤのナザレ という町のひとりの処女のところに来た」

- (1) エリサベツが妊娠6ヶ月を迎えた時
  - ①これもまた、2つの告知物語を関連させる言葉である。
- (2) ガリラヤのナザレという町
  - ①異邦人で、パレスチナの地理を知らない人のために書かれている。
  - ②前回の舞台は、エルサレムの神殿であり、ユダの山地であった。
  - ③ますます、あり得ない事が始まろうとしているという雰囲気である。
  - ④ナザレは、旧約聖書にも、タルムードにも出てこない町である。
- (3) ひとりの処女
  - ①今回の主人公
  - ②天使ガブリエルの再登場

### 2. 27 節

## 「この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリヤといった」

- (1) 処女の名は、マリア。
  - ①ヘブル語でミリアムである。
  - ②当時の女性の婚約年齢は、13歳くらい。15歳を超えることはないだろう。
- (2) 当時のユダヤ人の結婚の習慣
  - ①花婿の父親が、嫁を探すところから始まる(息子の意見は、多少反映される)。
  - ②いい娘がいたら、その父親に申し込みをする(娘の意見は無視される)。
  - ③正式な合意があれば、花嫁の父親に花嫁料を払う。
  - ④花婿が同意書を出し、正式な婚約関係が成立する。
  - ⑤同居は、さらに1年ほど先のことになるが、法的には結婚関係とみなされる。
  - ⑥もし花嫁が他の男と関係を持てば、姦淫の罪を犯したことになる。
  - (7)婚約関係の破棄は、離婚によってのみ可能になる。

- (3) ダビデの家系のヨセフ
  - ①マタイの福音書の系図で、ヨセフがダビデの家系であることを確認した。
  - ②ルカの福音書の系図では、マリアもまたダビデの家系である。
  - ③メシア誕生の前提条件である。

# Ⅱ. 告知 (28~38節)

1. 天使の出現(28節)

「御使いは、入って来ると、マリヤに言った。『おめでとう、恵まれた方。主があなたとと もにおられます』」

- (1) 同じ天使ガブリエルが登場している。
  - ①ザカリヤの場合よりも、記述が単純である。
- (2)「おめでとう、恵まれた方」
  - ①「おめでとう」は、シャロームであろう。
  - ②マリアが選ばれたのは、100パーセント神の恵みである。
  - ③マリアの側に何かの理由があったわけではない。
  - ④英語で「highly favored one」である。
  - ⑤カトリックのブルガタ訳 (ラテン語訳) では、「full of grace」になっている。
- 2. 見た人の恐れ (29節)

「しかし、マリヤはこのことばに、ひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ」

- (1) ザカリヤとマリアの違い
  - ①ザカリヤの場合は、「不安を覚え、恐怖に襲われた」(12節)とあった。
  - ②マリアの場合は、「とまどって、考え込んだ」とある。
- 3. 励ましの言葉(恐れるな)(30節)

「すると御使いが言った。『こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです』」

- (1) ザカリヤとマリアの違い
  - ①ともに、「こわがることはない」で始まる。
  - ②ザカリヤの場合は、願いが聞かれたという言葉が続く。
  - ③マリアの場合は、「あなたは神から恵みを受けたのです」となる。

### \*メシアの母となる特権

- 4. 神からのメッセージ (31~34節)
  - (1) 31 節

「ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい」 ①天使は、イザ7:14をほぼそのまま引用している。

「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける」

- ②ザカリヤにはヨハネという名が、マリアにはイエスという名が示された。
- ③イエスは、「イェシュア」(主は救い)である。
  - \*ルカの福音書でこの名は初めて登場。
  - \*ユダヤ人伝道では「イエス (Jesus)」より「イェシュア (Yeshua)」使用。
- (2) 32~33 節

「その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません」

- ①「すぐれた者となり」
  - \*偉大な者となる。
  - \*ヨハネの場合は、「主の御前にすぐれた者となる」(15節)であった。
  - \*イエスの優位性が示されている。
- ②「いと高き方の子と呼ばれます」
  - \*ヘブル語で「ハ・エルヨン」(神の御名)である。
  - \*ヘブル語的には、子とは父と同等である(子は父のコピーである)。
  - \*イエスの神性が示されている。
- ③「父ダビデの王位をお与えになります」
  - \*2 サム7:12~17 にあるダビデ契約の成就。
  - \*イエスがユダヤ人のメシアとして来られたことを示している。
- ④「彼はとこしえにヤコブの家を治め、」
  - \*ヤコブの家とは、イスラエルの民である。
  - \*これもまた、イエスがユダヤ人のメシアであることを示している。
- ⑤「その国は終わることがありません」
  - \*イエスの再臨と千年王国 (メシア的王国) 出現によって、成就する。
- 5. 不信仰の言葉としるしの要求 (34節)

「そこで、マリヤは御使いに言った。『どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに』」

- (1) ザカリヤとマリアの違い
  - ①ザカリヤの場合は、不信仰の言葉を語った。
  - ②マリアの場合は、どうしたらそれが実現するのかを尋ねている。
- (2)「男の人を知りませんのに」
  - ①知るとは、体験すること。
  - ②ヨセフと実質的な結婚生活に入っていない。
  - ③ヨハネの誕生は奇跡的なことであったが、イエスの誕生はそれ以上のもの。
  - ④ザカリヤへの告知とマリアへの告知は、ここで大きく道が分かれる。
- 6. 神からのしるし (35~38節)
  - (1) 35 節

「御使いは答えて言った。『聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます』」

- ①ヘブル的対句法がある。
  - \*聖霊があなたの上に臨み、
  - \*いと高き方の力があなたをおおいます。
- ②もうひとつのヘブル的対句法がある。
  - \*聖なる者、
  - \*神の子と呼ばれます。
- ③異教の神話にあるような、神と人との結婚ではない。
- (2) 36~37節

「ご覧なさい。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。 不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。神にとって不可能なことは 一つもありません」

- ①マリアに「しるし」が与えられた。
  - \*願っていないのに。
  - \*この「しるし」には、叱責の意味はない。
- ②親戚のエリサベツの妊娠が、「しるし」である。
- ③神には不可能はない (エリサベツ以外にも、先例がある)。
- ④創 18:14
- 「【主】に不可能なことがあろうか。わたしは来年の今ごろ、定めた時に、あなた

のところに戻って来る。そのとき、サラには男の子ができている」

## (3) 38節

「マリヤは言った。『ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように』。こうして御使いは彼女から去って行った」

- ①少女マリアの信仰は、信者の模範である。
  - \*払うべき犠牲の大きさを知りながら、従順に従った。

(例話) 今日のメシアニック・ジュー

②天使は、その使命を終えた。

## 結論:

- 1. マリアに関する誤解
  - (1) 無原罪の御宿り (Immaculate Conception)
    - ①イエスのことではなく、マリアの誕生に関することである。
    - ②マリアは、神から恵みを受け、特別な方法で用いられた。
    - ③しかし、マリアもまた罪赦された罪人であった。
    - ④マリアは、十字架のそばに立っていた(ヨハ19:25)。
    - ⑤マリアは、聖霊降臨の前に、使徒たちとともに祈っていた(使1:14)
  - (2) マリアの処女性
    - ①マリアは、イエスを宿す前も後も、処女であった。
    - ②しかし、イエスを出産してからは、ヨセフとの結婚関係に入った。
    - ③マタ1:25

「そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた」

④マタ 13:55

「この人は大工の息子ではありませんか。彼の母親はマリヤで、彼の兄弟は、ヤ コブ、ヨセフ、シモン、ユダではありませんか」

- (3) マリアの偶像化
  - ①ルカ 11:27~28

「イエスが、これらのことを話しておられると、群衆の中から、ひとりの女が声を張り上げてイエスに言った。『あなたを産んだ腹、あなたが吸った乳房は幸いです』。しかし、イエスは言われた。『いや、幸いなのは、神のことばを聞いてそ

## れを守る人たちです』」

- ②マリアは、ペンテコステ以降は登場しない。
- ③マリアの死や、昇天については何も書かれていない。
- ④マリアが祈りの仲介者であることも書かれていない。

## 2. 処女降誕の重要性

- (1) 字義通りに読むことが重要である。
  - ①受肉の出来事には、このような奇跡がともなうことは当然である。
- (2) イエスの2面性(神性と人間性を持つ)
  - ①イエスは、初めから神である。
  - ②イエスは、マリアから人間性を得た。
- (3) 原罪
  - ①通常の結婚ではない。私たちは、両親から原罪を継承している。
  - ②マリアの原罪は、継承しなかったのか。
  - ③35 節

「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、 生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます」

- ④聖霊による処女懐胎は、原罪を持たない人間の誕生に必要なものであった。
- (4) 最後のアダム
  - ①1 コリ 15:22

「すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによって すべての人が生かされるからです」

②1 コリ 15:45

「聖書に『最初の人アダムは生きた者となった』と書いてありますが、最後のア ダムは、生かす御霊となりました」